
平凡なはずの毎日

マリン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

平凡なはずの毎日

【Nコード】

N5071Y

【作者名】

マリン

【あらすじ】

一人の美少女転入生が生徒会や風紀委員長を陥落させて……いる横で

その少女と親友になった平……。凡？？な少女が実は非王道な役員達と戦い前のような平和な毎日を取り戻そうとしていく話

登場人物

浅葱 憂衣

17歳。 桂華学園2 - A 剣道部副部長

基本的に無口無表情・・・だと思われているが実際は毒舌大魔王。あまり顔に出ないので気づかれない。が、怒らせたら無表情で相手の弱点をつく。それすら超えると眼が笑ってない笑顔で相手の精神を折る。

根深い。だが基本的には無害。無関心。

一度懐に入れた相手には甘い。ものすごく。

濃い茶髪に黒に近い茶色い眼をしている。肩まである髪を無造作にそのまま伸ばしているが髪質がいいのか綺麗なストレート。中の上・・・な顔立ち。

宮中 花蓮

17歳。 桂華学園2 - A

転入生。明るくどんな場所においても中心人物になれる・・・が度を越えすぎている。どんな人間にも物怖じしない度胸を持ちすぎている。基本的に自分は正しくて愛されるという間違った認識をしている。基本的に人の話を聞かない。きいても自分の都合が良い方に解釈する。

金髪に青い眼。赤いリボンで後ろで肩の下まで伸びた髪を無理やり頭の上で括っている。 文句なしの美少女。

篠山 しのやま 大河

17歳。 桂華学園 2 - F

花蓮が来るまでは一匹狼だったが怪我の手当てをして貰い自分相手にも優しく接してくれた花蓮に惚れた。傍にいる憂衣を邪魔だと思

ってるが嫌われたくないので基本的に無視をしている。実は隠れたしゅみがあり……

銀髪に緑の眼。髪は染めてアシメにしている。不良な外見だが美形。

たけやま
篠山 爽也

17歳。 桂華学園 2 - A サッカー部エース

クラスの中心にいるスポーツ爽やか少年。だが憂衣とも運動部関係で部長同士が恋人同士なので

お互いに親交があった。だが花蓮が転入してきてからは敵視している。

スポーツ特待生。頭はあまり良くない。だが少し黒い。

茶髪に茶色がかった黒い眼。もちろん美形。

時任 輝夜

25歳。 桂華学園 2 - A担任 生徒会顧問。

憂衣のクラスの担任。俺様だが生徒思い。

花蓮が転校してきてからは花蓮の尻拭いをしているせいで信者と勘違いされている。

憂衣とは憂衣の幼馴染の従弟なので小さな頃から知っている。

金髪に青い眼もちろんカラコン。当たり前前に美形。

登場人物（後書き）

今はまだこれくらいまた増やしていきます。

なんで私なのか

なんで私なのだろう………

そう思うのが私の日課というか口癖になっている。

口癖といっても心の中で呟いているだけだが……

最近はそう思わない日がない。

私は平凡だ。自分で言うのは悲しいが実に平凡だ。

可愛い訳でも綺麗な訳でもはたまた頭がいい訳でもスポーツ万能なわけでもない。

どこにでもいるいたって平凡な少女だ。

そういうと知り合いの何人かは違うと言うが私は平凡だ。

ちよつと毒舌だとは思うが最近は何も喋っていない。

そう私は今まではクラスの中では何も目立つ所がない一生徒だった。まあ無表情だったがそれなりにクラスの中には溶け込めていたし違うクラスに親友がいた。

過去形なのは仕方がない。

今はそんなものではないのだ。

一人の少女によって。

「憂衣くゝ何してるのくゝ??」

と私に話しかけてきた少女がいた。

そうその少女こそが私の日常を崩した原因だ。

宮中花蓮。

ぱつと見は美少女だろうが私には関係ない。

私にとって彼女は害悪なのだ。

彼女のせいでわたしの日常がなくなったと思うと憎くて仕方がない。
だがそんな事言っただけで彼女を泣かしたら大変なことになるのだ。

嘘でもなんでもなく・・・

彼女は2週間前に転入してきた。

そして彼女はこの学校の人気者を次々落していったのだ。

生徒会の一部に一匹狼に爽やか少年等々・・・

そんな彼らに睨まれたら厄介だ。

特にこの学校では。

この学校は良いとこの家の子が通う小中高のマンモス校だ。

そして親の権力がものを言う。

かくいう私も一応良いとこのお嬢様なのだがこの平凡な顔のせいで
わからないらしい。

人間顔だけじゃないような気もするが・・・

なのであまり敵には回したくない。

敵にまわしても問題はない・・・と身内や幼馴染が言うが・・・
はつきり言っただけで面倒くさい。

彼らのために時間と労力を使ってやるほど暇じゃないのだ。

「憂衣ってば～～～」

と宮中が声をかけてきていたので返事をする。

「予習よ。明日の。」

と言いままた机にむかった。

「そ～～なんだ～～。えらいね～～」

と笑顔で言ってきた。

どうして上から目線なのだろう。

彼女には多分そんな気はないだろうが私を見下している。

ようするに引き立て役にしているのだろう。

むかつくがそれだけ。

だって他に思い浮かべる感情なんてそれだけしかない。
むかつき。

そうそれだけだ。

嫌いやらなんだのは彼女に浮かべる感情ですらない。
無関心。

そうとつてもいい。

だが彼女は私を引き立て役にしたかったのでかまってくる。

事あるごとに私をこの学校で出来た初めての親友だと吹聴している。
そのせいで彼女の信者に睨まれる。

それもどうでもいい。

その事を知っている知り合いはそんな彼女を嘲笑したり可哀想な子
を見てるかのような眼で見ている。

だって本当にどうでもいいし……

「ありがとう。あなたはしないの？」

と言い彼女を見ると

「後でするよ〜」

と返ってきた。

どうでもいいかと思っているが流石にずっと横に立たれていると気にな
る訳で……

「なに？」

と返すと

「一緒にお昼いこ??」

と返ってきた。

しょうがないので教科書やノートをしまい席を立つ。
断ればしつこいので素直に従っている。

そして私はまた思う。

なんで私なのだろうか……

なんで私なのか（後書き）

仕事が忙しくなかなか投稿できませんでした。
次からも短いですがゆっくりと進めていきたいです。

気のおける友達との休憩時間

あれから一緒に昼食をとりさらに夕食もとった。

今はなんとか理由をつけて離れられた。

それでも随分とひきとめられ今いける。そう思うと足取りが軽い。

あの少女が来てからまともに会っていない。電話やメールでは心配ばかりさせているので

今日はこれまでの分と・・・これから分まで遊ぼう。

そう思いながら部屋に着きチャイムを押した。

「はい・・・憂衣!!」

と出てきて驚いたのが一人目の親友西園寺 堇。

綺麗な黒髪を腰の長さまで伸ばして遺伝だという緑の眼をただでさえ大きいのにさらに大きくさせている。しかも絶世の美女だ。あの転入生でさえ霞んでしまう。

そんな彼女は華桜会の会長をしている。

この学園はある意味三権分立気味だ。

まず男子生徒中心の生徒会、女子生徒中心の華桜会そして男女混合の風紀委員会だ。

まず生徒会が外側の枠組みをし、華桜会が内容を詰める。そして風紀委員会がその行事中に警護や不備

などをたしかめている。その為その生徒達には親衛隊なるものがある。

堇はそのトップだ。

「突然ゴメン。今いいかな。」

と軽く笑いながら告げると、

「勿論です。はやく入って下さい。」

と招き入れられた。

そしてリビングに行くと思像通りの二人の姿があった。

「憂衣!!なんで今まで来なかったんだよ。」

と軽く睨みながら言ったのは水無瀬 葵。

風紀委員会の副委員長をしている。茶色いショートの手でカラコンのオレンヂの瞳をしている。

美少女というより美形でよく男と間違えられる。制服もスカートがイヤだというので体操着を着ている。

口調も男言葉で女子生徒に人気がある。それでも恋人兼婚約者がいるのでそれを知っている生徒達は

応援している。

「しょうがないじゃん葵。憂衣はあの馬鹿女のせいで疲れてるんだから。」

といったのは神名 早苗。生徒会長の親衛隊隊長をしている。

葵より明るい

茶髪に天パだという髪を耳よりしたで左右に括った髪をしている。

そしてカラコンだろう蒼い瞳だ。

明るく今時の女子という感じだが芯がしっかりして親衛隊を上手く統率している。

「やっぱり皆といるのが一番落ち着く。」

と返しながらリビングのソファに座った。

「紅茶にします?? コーヒーですか? どちらがいいですか。今は緑茶をきらしてしまって・・・ごめんなさい。」

と首を傾げながら尋ねてきた。

「じゃあ紅茶で。砂糖を入れないストレートがいい。」

と言うと董は頷いてキッチンに向かった。

「よくあんな苦いの飲めるよな。あんなん人が飲むもんじゃねえよ。」

と葵が顔をしかめながら言った。葵の一番女の子らしい所がこの甘党だ。

「美味しいわよ。それに董が淹れてくれるのはまた格別なもの。」

と返す。董は紅茶好きで飲むだけじゃなく淹れるのも好きらしい。

キッチンにいったら紅茶の茶葉が棚に

ぎっしり詰まっていた。

「でも葵のは異常だよ。あんなに砂糖入れて胸焼けしそう。」

「と舌をだして早苗が言った。早苗はやはりジュース類が好きだが今はコーヒーのカップが置かれていた。」

「あれ？ジュースじゃないの？」

と聞くと

「ジュースばかりはダメって怒られた。」とむくれながら言う。

「それはしょうがないですよ。ジュースばかりではすぐに太ってしまいますから。」

と董が紅茶を持ってリビングの空いている席に座った。

そして私は紅茶を一口ふくむと

「やっぱり美味しい。今までインスタントの紅茶ばかりだから余計にかんじる。」

と身体の疲れが一気に抜ける気がしながら董に向かっていった。

「そんなにあの女は大変か？」

と葵が身を乗り出しながら聞いてきた。

「まあね。人の話なんか全く聞かないのに自分の話は聞いて欲しいなんて・・・あきれてるわよ。おまけにすごく強引だし。見てよこれ。」

と言いながら右手首の袖を巻くつて見せた。そこには人の手に掴まれたとはつきりわかるくらいい痣があった。

「これは・・・酷いです。」

「うげ、多分これしばらく取れねえぞ。」

「イタそう。どんな馬鹿力な訳？」

と3人とも顔をしかめながらいった。

そこで早苗が気がついたような顔で聞いてきた。

「親衛隊のほうは大丈夫？なんとか私達の隊で止めようとしてるけど上手くいかなくて・・・」

と心配そうな顔をしながら聞いてきた。

「大丈夫よ。今のところは靴箱と机の上を荒らされているだけだから。」

と返すと

「やっぱりそれぐらいはされるかゝゝでももつと酷くなったら私達に言つてね。なんでもするから。」

と笑顔で言ってくれたので嬉しくなり飛びついた。

「私達にもですよ。親友なんですから遠慮なんかしないで下さいね。」

「

「そうだぜ。特に私は風紀なんだからな。委員長の馬鹿は私達風紀委員で締め上げるからな。」

と二人も笑顔で言ってくれたので早苗を巻き込んで二人にも突撃した。

結果四人まとめてリビングに倒れた。

「3人とも有難う。」

と囁いた。

「はい。」「おう。」「うん！」

と口を揃えて帰ってきて4人全員で笑った。

しばらくすると早苗が

「でもこの体制あの二人がみるとどう思うかな・・・」

と呟くと董と葵そして遅れて早苗が離れていった。

「大丈夫でしょ。私達が親友だって知ってるんだし。」

とかえすも

「いや。駄目だな。あの二人の独占欲はそんな物関係ない。」

「確かに・・・」

「そうですね・・・」

と3人がいうとタイミングよくピンポンとチャイムが鳴った。

4人で顔も見合わせて引きつった笑いをすると董が意を決して立ち

上がって玄関へ向かった。

「もしかして・・・」

「いやそんな馬鹿な・・・」

「そうですよ。そんなタイミング良く・・・」

と言い合ってる内に顔を青くさせた董の後ろからきた人物を見ると引きつった笑いしかでなかった。

気のおける友達との休憩時間（後書き）

さあ誰が来たんでしょうかね。
またまた新キャラが出ます。

うざいけれど大切な人達

三人は嫌な予感を感じながら目を足元から顔に目線を上げると同時に喉の奥で悲鳴を上げた。

「ちよつと」なんてそんな顔するの?? 憂衣、葵。それがお兄ちゃんと恋人に向かつてとる態度?」

と頬を膨らませながら言っただのはこの蓮華学園生徒会会計の浅葱瑠衣だった。金茶色の髪を首元まで

緩く巻いた髪をしてカラコンの橙色の眼をした軽そうな美形。苗字でも判ると思うが実の兄である。そして葵の恋人でもある。

「お前に会いたくなかったんだろ?」が。そんなこともわかんねえならここを辞める。」

と偉そうな態度で大胆不敵な事を言うのが生徒会長の光ノ宮 龍貴だ。真っ赤な髪に光ノ宮家特有の金色の眼をしたワイルド系な美形である。実を言うと憂衣と龍貴は恋人兼婚約者でもある。

「違うよ」龍ちゃんが怖いからだよ」だってお兄ちゃん&恋人に会いたくないなんてそんな訳ないもん。龍ちゃんは恋人って言っただって親の取り決めでしょう? だからしょうがないよ」。諦めなよ。」と口喧嘩をしながらこちらに向かつて来た。そうこの二人は何故か私の事を溺愛している。

こんな平凡に龍貴なんてもったいないと何回も言っただがそれでもこの関係でいる。私は昔から龍貴の事が好きだったので嬉しいが横に立つととても申し訳ない気持ちで一杯になる。親衛隊の人達は認めてくれているが私は早苗や副隊長が横に立つ方が凄く絵になる。それでも私達は恋人だ。龍貴だけは誰にも渡したくないと思うほどには思っている。まあ他から言わせれば私達みたいなバカップルの邪

魔をするのは疲れるそうだ。瑠兄とは血が繋がっているのが不思議なくらい似ていない。私が父、瑠兄が母に似たからだろうといわれている。私達が兄妹だということはあまり知られていない。似てなさ過ぎるために今知っている人物は親友達に龍貴そして時任先生だけだ。あまり目立ちたくないので調度いい。

「それで憂衣？それは何？」と笑顔で尋ねてきたのは腕の痣の事だろう。龍貴が腕を取って舐めてくるのをあしらいつつ答えた。「あの女よ。こんな事するのは決まってるじゃない。」

「わかった〜〜」と部屋を出て行くこうとする瑠兄を慌てて止めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5071y/>

平凡なはずの毎日

2012年1月14日20時52分発行